

日本ビオトープ協会 2025

ビオトープ No.56

特集「ビオトープの原点を学ぶ」Vol.1



「カヤタケを食べるエゾリス」
写真 内海千樫氏 撮影



特定非営利活動法人

日本ビオトープ協会

目 次

頁

巻頭言

ビオトープの森再生の目的と手段	岡村 俊邦	1
-----------------	-------	---

特別寄稿

ビオトープの原点とアイヌ伝統文化の今日的継承	吉原 秀喜	2
------------------------	-------	---

シリーズ連載

ビオトープのいきものたち - その40 -	神垣 健司	6
-----------------------	-------	---

会員・BA等投稿

巣箱とビオトープ	松岡 和樹	8
----------	-------	---

キツツキの世界 その7	内海 千樫	10
-------------	-------	----

里山におけるビオトープの保全・復元・創出 その3	葉名 康弘	12
--------------------------	-------	----

協会活動状況

各地区委員会 8地区 活動 計画・報告等 / 総会・フォーラム報告	各地区委員長 / 協会事務局	14
-----------------------------------	----------------	----

第17回ビオトープ顕彰 受賞式講評・各賞紹介		17
------------------------	--	----

連載コラム

ビオトープ拝見 その7	立川 周二	20
-------------	-------	----

表紙・裏表紙写真の説明

「カヤタケを食べるエゾリス」

エゾリスは、色々なキノコを食べる。よく毒キノコを見分けられると思うが、実はキノコに対しては耐性があり、猛毒のベニテングダケを食べても何でもないのだ。

「カッコウセンノウの花にきたオナガアゲハ」

オナガアゲハは北海道西部～南部、本州、四国、九州に生息する。と言われていたが、ここ数年、道北の幌加内町でも数が増えて来た。温暖化の影響だと思われる。クロアゲハに似ているが、ずっと細くてスマート。

カッコウセンノウ(リクニス・フロスクリ)はナデシコ科センノウ属の多年草である。ヨーロッパやアジアに自生し、道端や湿度の高い牧草地で見られる。イギリスでは、農場の近代化や湿地の灌漑によりその数が減少し、既によく見られるものではなくなっている。

アメリカ合衆国北部やカナダ東部にも帰化するようになった。

撮影：個人会員 写真家 内海千樫（北海道幌加内町在住）

ビオトープの森 再生の目的と手段

日本では、目的を達成するための手段が目的化している現状が多く見られる。ビオトープの森づくりの活動でも、このことが顕著に見られる。専門的技術を持たないが、なんとか環境の改善に関わりたいと願っている組織、団体は、同じ森づくりに関わる木材資源の獲得を第一義とする針葉樹人工造林の造成技術と、それらを担ってきた機関や組織に指導や実践を託すことが多い。

しかし、ビオトープとの関わりでの目指す森は、地域の潜在自然植生の主体をなす広葉樹混交林であり、針葉樹人工林の造成技術を援用しても、目指す森の実現は困難である。それでも、このことが問題にならないのは、森の出現には長い時間が必要であり、目的通りの森が出現したかより、自分たちが現在進行形で関わっている手段をつつがなく実施することに関心が向かうことが多いためと考えられる。

そして、極端な場合は、植樹を行い、その後、植栽した苗がすべて枯れても、同じ場所に同じ方法で繰り返し植樹する例も見られる。つまり、森の出現より、植樹をするという行為が目的化している極端な例である。

また、このような活動に社会貢献の一環として資金を提供する機関の担当者も、森づくりに関する専門知識を持ち合わせていることは少なく、現場での活動が、当初の目標を満たすものであるかの判断する能力にかけている事が多い。この結果、資金提供の採択基準が、目指す森が実現することの可能性の大小ではなく、針葉樹人工林の技術に準拠したものになっているか、また、活動結果の成否の判断が、苗を計画通りに植えたかという手段だけの問題になりがちである。

ビオトープの森を再生しようとする人々や機関の思い、労力、資金、土地を有効に活かすには、目的と手段の混同をなくし、将来的に目指す森の姿を明確にし、関係者で共有し、長期にわたる目標林出現の期間に、それらを引き継ぐ戦略を立てて実施する必要がある。

森づくりのような実現までに長期の時間を要するものの戦略として、バックキャストिंगがある。これは、未来のある時点での望ましい状態や目標を設定し、そこから現在へと逆算して行動計画を立てる思考法である。100年後、200年後の目標を設定し、時間を逆行させながら、各時点で実施すべき内容を検討し、その時点での実施結果の成否を判断(モニタリング)し、最終目標に合わせて実施内



特定非営利活動法人 近自然森づくり
協会 理事長 兼 北海道支部長
北海道科学大学名誉教授 農学博士
岡村俊邦

容を修正する戦略である。このことにより、より確実に当初の目的を達成することができる。

十分な自己資金や人材、場所がある場合は、真っ当な指導者を選び、独自に計画を立て、上記のバックキャストिंगを用いて望ましいビオトープの森を造成することが可能である。しかし、多くの場合、他の機関や個人からの資金、土地の提供を受け、活動することが多い。このため、望ましいビオトープの森を造成するには、直接的な活動団体だけではなく、その活動の支援や土地を提供する公共機関や企業、団体、個人が上記の視点での目的を共有し、目的の達成のための手段を提供する必要がある。

以上、述べた点は、ビオトープの森づくりに限らず、一般の経済林にも適用できるものである。森づくりは、本来、最終的な目標を達成するため、育苗、地ごしらえ、植え付け、下刈り、除伐、間伐、主伐の全体をシステムとしてトータルに合理性をもって計画、実施すべきものである。しかし、現行の補助金制度は、部分的なそれぞれの手段に複雑な補助金を設けているため、実際の現場では、森づくり全体としての合理性が損なわれている例が多い。

広葉樹の人工造林の場合も、長期(6年程度)にわたり下刈りが実施される。梅雨時のこの作業は、過酷であり、また、針葉樹と異なり、育てるべき苗と蒔るべき草本の区別が現場では難しく、苗を刈り取ることが多い。

このような問題を回避するため、ビオトープの森づくりでは、防草シートを利用しているが、現行の制度では、防草シートの費用は認められていない。一方、防草シートを敷設することで、下刈り費用は不要になる。この結果、防草シートの敷設、撤去の費用は、下刈り費用を大幅に下回ることになる。この例のように、部分だけを追求する補助金制度は、全体としては不合理なものになっていることが多い。このような、本来の目的の達成を阻害する森づくりの現状を改変する必要があると考える。

ピオトープの原点と アイヌ伝統文化の今日的継承



個人会員
北海道 平取町アイヌ施策推進課
イオル整備推進係 学芸員(課付)
吉原 秀喜

アイヌ民族系著名人の一人で工芸家、著述家、民俗研究家(博士)であり、参議院議員でもあった萱野茂氏が編んだアイヌ語辞書に、古くから伝わってきた次のような「ことわざ」が紹介されています。「天から役目なしに降ろされた物は一つもない＝カント オロ ワヤク サク ノ ア・ランケハ シネフ カ イサム」(『萱野茂のアイヌ語辞典増補版』三省堂2002,486頁)。

アイヌ伝統文化の観点からピオトープについて考え、その原点は?と問うと、この一文が浮かびます。人や集団ごとに、それぞれの原点があって良いのだと思います。人間を含む生きるものそれぞれが、それらしく生きることができる空間。ピオトープという概念を掲げて行われている様々な貴い試みが目指すのは、概ねこうしたところ・場を大切にすることではないでしょうか。そうだとすれば、アイヌ社会の上記格言は、いっそうに味わい深いです。

つい先日、6月13日に開催されたピオトープフォーラムin札幌2025では、<北の大地から…ピオトープの原点を学ぶ>が全体テーマでした。筆者も関わる平取地域の取組に、日本ピオトープ協会会長特別賞を授かる望外な「事件」も加わり、関係するコバが脳内をかけめぐっています。フォーラムでの事例発表や、協会誌に論稿をとのご依頼まで受けて、胸中を整理するためにも戸惑いながらオリバクトゥラノ(=遠慮の心とともに)書かせていただきます。

本論説では、平取地域におけるピオトープの特徴について3つの観点から論じます。一つには、地域文化とりわけアイヌ文化との関係性が強いピオトープであること。二つには、多様性豊かで広大なピオトープのネットワークを想定していること。三つには、地域

的・民族的コミュニティに根ざす取組であること。これら3点を順次に記していきます。

1 アイヌ文化との関係性が強いピオトープ

平取地域のピオトープの特徴の一つ目は、アイヌ文化との関係性が強いことです。そのため、前述のフォーラムにおける事例発表では「文化的ピオトープ」との表現を多用しました。その根幹を成している取組を、地元ではアイヌ語を用いてイオル(IWORとも表記)構想と称しています。行政的には「伝統的生活空間」という術語も時に使われます。1997年の「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」(アイヌ文化振興法)制定・施行が契機となって始まった施策・事業の内では、主要な柱の一つとして位置づけられています。

平取町では、2000年を前後する時期に整えられた<沙流川流域IWOR(イオル)構想>のもとに、一地方としては骨太な各種関連事業が進められてきました。詳述するには大量の資料が必要となるので、ここでは図Aと前述の札幌ピオトープフォーラムにおけるスライド画像によって、そのイメージをお伝えします。

筆者はこの構想や関連施策・事業の起ち上げや推進に関わってきた当事者の一人ですが、事業の参考となり、多くのヒント・アイデアをもたらすものとして、ピオトープ概念がありました。



A:二風谷コタン内の平取町立二風谷アイヌ文化博物館

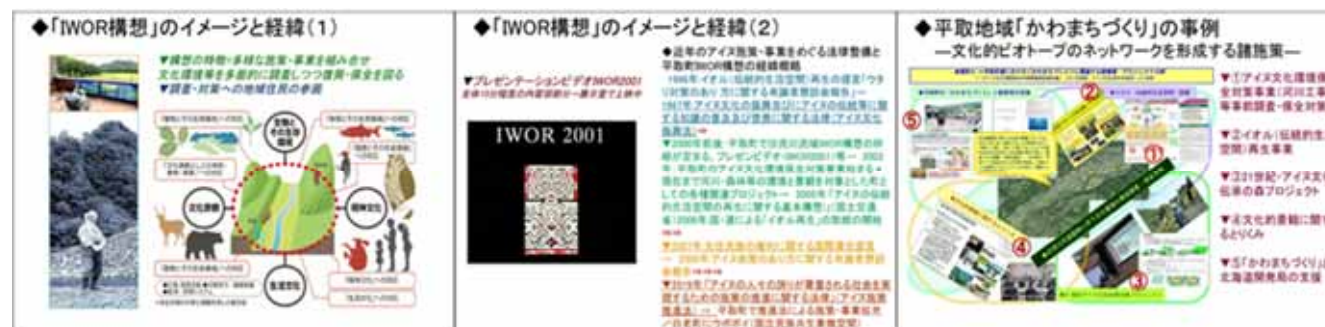
B：ピトーブフォーラムin札幌2025において平取町のチームが発表したスライド画像から



イランカラブター。
アイヌ語の挨拶言葉。北海道内でも方言
差がある。使われる場面は拡大中。

イオル、イウォロ、iwor、IWORなどの
表現が使われる。アイヌ民族文化の復興・振興を目指す構想、取組を指す。

北海道の空の玄関、新千歳空港から
車で約60分程度。発表チームは皆、IW
OR構想、イオル・ピトーブの関係者。



左はアイヌ伝統文化継承者として高
名な木幡サチ子さん。こうした方々の参
画を重視し、調査・対策を続けてきた。

2019年の「アイヌの人々の誇りが尊
重される社会を実現するための施策の
推進に関する法律」が取組を促進した。

IWOR構想の主要な関連施策・事業
は、各々持続的・発展的に進められてい
る。もちろん企業や個人の動きも重要。



再生事業初期から重要な試験地・実
践地として位置付けられてきた水辺のピ
トーブ。関係者の協働が続いている。

文化庁の「重要文化的景観選定」枠
組を積極的に活用してきた。本町地区独
自の計画を提案し、実現していきたい。

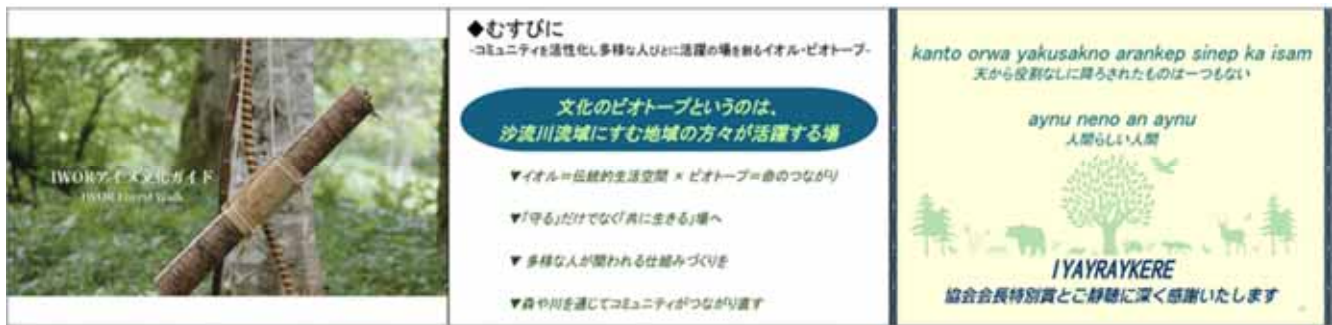
平取本町地区の計画を、2024年新し
く誕生した日高山脈襟裳十勝国立公園
の保全・活用とも連動させていきたい。



村をまわるカムイであるシマフクロウは
森林ピトーブの象徴的存在。生態学上
のアンブレラ種は文化面でもシンボル。

猟も漁も採集も文化的ピトーブに
は欠かせない。それらに伴う儀礼、精神
と作法と技を弁えた人材も欠かせない。

ガイドツアーではステレオタイプな「伝
統文化」ではなく、復興・振興をめざす取
組の「いま」を伝えることを重視している。



自然と人間の姿をいきいきと伝えるツアーは好評を博しているが、自分達自身の気づき・学びを大切にしたい。

「地域の方々が活躍できる場を共に創る」。イオル・ピオトープの重要なミッションを、再認識する機会を頂いた。

原点となる伝統文化、培われてきた知識や哲理を、環境を再生・保全しながら深めていくピオトープ。どうぞよろしく。

2 多様性豊かで広大なピオトープ・ネットワーク

平取町を北東から南西に貫流する一級河川、沙流(さる)川の名はアイヌ語に由来します。湿地・湿原を意味するsar=サル(サウやシャリと発音する場合も)がつく地名が、沙流川自体の名称だけでなく水系の随所に現れます。余談になりますが、その歴史性からアイヌ・エミシ語系地名が引き継がれた場所が多い東北地方で、例えば「猿」の字が用いられている地名の内のいくらかには、同じ起源のものがあるようです。野生の猿が棲息しない北海道日高地方の場合には「沙流」、通常でも沙が多く流れ、時には一気に地形の様相を大きく変えるほどに、という川の特徴を示す巧みな漢字変換が行われている、とは筆者が持論としているところです。

前節では、平取町が取り組んでいるのはアイヌ文化との関係性が強いピオトープであると説明しました。共通する志向・目的を有するので、それをイオル・ピオトープと称することが可能なことも。「日高山脈襟裳十勝国立公園」が昨年6月に誕生しましたが、国立公園内北部域に源を発し、全長約104kmの沙流川水系内にある国公有林野や企業林、そして河川・湖沼・海浜の水辺空間全域で利用可能なところでイオル・ピオトープを形成し、ネットワーク化しようと試みてきました。水系内の平取町域では、施策・事業の一定程度が進んでいて、成果が積み上がっています。

沙流川の多様性の豊かさについて、簡略に補足します。全長104kmの川がどのような自然環境のもとにあるか、イメージしてみてください。例えば、5月半ば過ぎにドライブすると最上流部付近、日高・十勝の境にある日勝峠付近には残雪がかなり残っていて、朝晩だと路面の状況が心配になるくらいです。沙流川に沿って太平洋側に向かって下ると、季節がだんだんに進んでいきます。平取町内では針葉樹・広葉樹の混交林植生が多彩な色合いで目を楽しませてくれます。下流部の平地では、陽射しが強い日はもう初夏の風情です。地殻プレートの動きなどの地球科学の情報があると、風景を見ながら山脈の形成史に思いを及ぼすことも可能です。源流部から河口部まで2

時間ほどで、1億年単位のジオ・ドライブが可能かも。いくら寄り道をしてもし一日あれば、自然や人びとのくらしの多様なあり方に実際にふれ、学び、楽しめる立地なのです。

詳しい説明には、やはり多くのスペースが必要です。アイヌ政策全般やその民族文化についてはWEB上の平取町と平取町立二風谷アイヌ文化博物館、UPOPOY＝国立アイヌ民族博物館を含む民族共生象徴空間、国土交通省、文化庁、そして意外に関係情報が豊富な首相官邸・内閣官房等ホームページにアクセスしてみることをお勧めします。また、YouTubeには平取町アイヌ文化振興公社の取組を紹介する動画が公開されていますので、ぜひご覧ください。

本論考の内容に即しては、やや先行し出版される日本河川協会『河川』誌2025年7月号に掲載の木下正人・吉原秀喜共著「アイヌ文化を活かした水系空間の現代的再生 - 沙流川流域IWOR構想のもとで文化の素材と人財を育む環境・システムを整備 - 」と題した論考が参考になるでしょう。

多様性豊かで広大なイオル・ピオトープのような考え方と、そのもとでの動きを、河川や森林の管理機関はどのように受けとめているのか。読者が気になる点かもしれません。例えば、IWOR構想の関連事業である「かわまちづくり」については、今年2月に国土交通大臣表彰「かわまち大賞」を受けることができました。河川については、「流域治水」「水系一貫」「水系空間」というように、個々の自治体も住民も、川筋全域をカバーする視野をもちながら自身の具体的な問題に対処し、そうして相互に呼应しあう姿勢が求められていると考えています。

森林の分野では、北海道森林管理局／平取町／平取アイヌ協会(アイヌ民族系の道民で構成された一般社団法人北海道アイヌ協会の地方組織)の三者により、＜21世紀・アイヌ文化伝承の森再生計画＞と名づけられた包括的協定が結ばれています。協定は町面積のおよそ66%を占める国有林野全域を対象としたものです。他方、平取町内に約5800haの山林を有する三井物産と同じく三者によるFSC国際森林

認証に関わる協定を結んでいて、パートナーシップがだんだんと深まって来ています。同様な動きは、他社の民有林にも広がっています。

3 地域的・民族的コミュニティに根ざすピオトープ

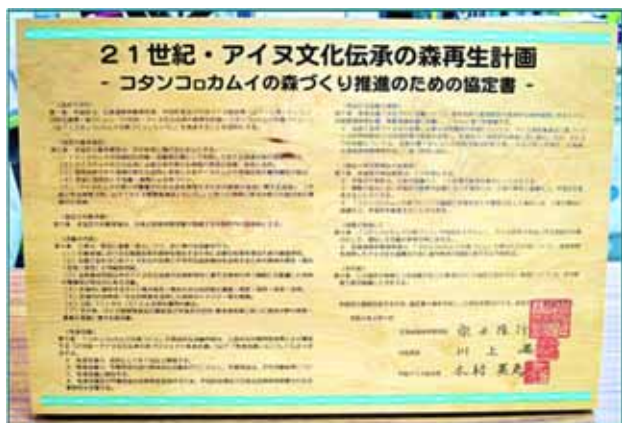
自治体の在り方をめぐる議論に、コミュニティバースド、「地域に根ざす」という意味のカタカナ語が時々出てきます。ここでさらに「民族的」と加えるのは、アイヌ民族系の人々が住民の数割には及ぶ地域の事情（*ダブルやマルチで民族的アイデンティティを有している方々も多い）を考慮しているというサインだと解釈してください。具体的に例えば、前節で示した森林に関する協定等が「三者」によるものとなっているのは、アイヌ民族系の人たちを代表、あるいは象徴する組織としての平取アイヌ協会が加わることで参画感が高まり、当事者間の協力関係が確かなるための方策の一つなのです。

写真Cは、その国有林野に関する協定書です。木製ですが、ディスプレイ用ではなく、これ自体を協定書本体として扱い三者各々で共有しているのです。これもコミュニティに根ざした施策の目的とパートナーシップを確かなものとする工夫の一つと言えます。

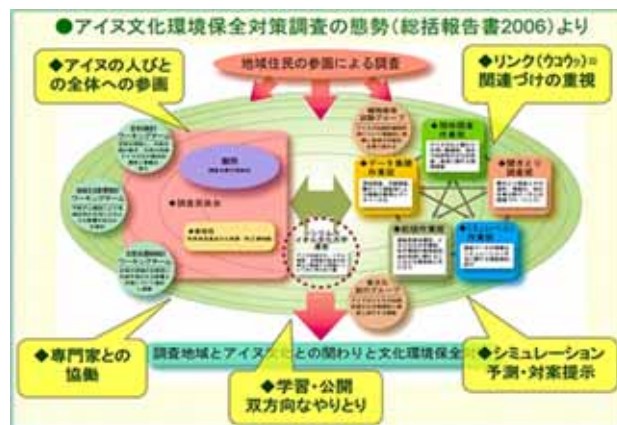
コミュニティに根ざした施策・事業を持続するための方策を二つ、ごく簡略で恐縮ですが提示します。

一つは、＜地域住民の主体的参画と専門家との協働＞という原則を掲げて2003年にスタートした、アイヌ文化環境保全対策事業の座組みを解説した図Dです。実はこの取組の中で、河川整備工事に伴う影響への対策案が、一時「文化環境ピオトープ」の表現を用いて提示されていました。「ピオトープ」より「イオル」の語を使いたいとの関係者の思いが働いたことが一因でしょうか、2008年前後の時点では、その名称は前面には出なくなりました。でも今は、「イオル・ピオトープ」とか「文化的ピオトープ」との表現は、取組をわかりやすくする効果も考慮され、好ましく受けとめられていくように、筆者は感じているところです。

もう一つ、図EのFPIC原則も遵守すべきです。



C: 21世紀・アイヌ文化伝承の森再生計画協定書



D: アイヌ文化環境保全対策調査の態勢解説図



E: FPIC原則と「+C」の考え方について

* * * * *

アイヌの文化伝統の様に、自然との関係性が強い特性を有する場合、その回復を図ろうとする「再生」や「復興」の営みは、環境自体のあり方を強く意識せざるを得ません。当地における取組では、自然環境や景観そのものが文化のインフラであり、不可欠な社会基盤としての保全・整備・再構築を、といった表現の課題提示を、機会がある都度くり返してきました。

自然そのものがインフラ・・・その言い方、どこかで聴いたことがあるような気がしませんか。ピオトープ協会に関係してきた方々なら、まさにこの会誌が前々号・前号で特集に掲げたのが「グリーンインフラ」だったと連想するのでは。このコンセプトほか、本論説ではもっと採り上げたい論題もあったのですが、それらはまた別な機会を期します。そのためにも「ピオトープの原点」を意識しながら、その具現・実装・深化に向け引き続き関わられるならば、ありがたいです。

[参考文献]

萱野茂2021『完本 アイヌの碑(いしづみ)』朝日新聞出版
平取町2006『アイヌ文化環境保全対策事業総括報告書』
吉原秀喜2020『アイヌ・アートと伝統文化の今日的継承』
(池田忍編『問いかけるアイヌ・アート』岩波書店、所収)

ビオトープのいきものたち - その40 - 今年の干支は「巳」 身近な爬虫類を知ろう



さとやま自然史研究会
会長 神垣 健司

今年は巳年（へびどし）、ヘビが主役の年です。ヘビは爬虫類ですが、ヘビ以外にもトカゲやカメも同じ仲間になります。カメは両生類と勘違いされている人も多いようで、カメが爬虫類と知って驚かれます。基本的には、水から離れて生活できるのが爬虫類で、できないのが両生類とされています。そして爬虫類の卵はほとんどの種類で硬い殻に覆われ、両生類は卵囊というゼラチン状の物質で覆われています。また爬虫類は産まれたときから成体と同じ姿をしています。両生類は幼生期にはエラがあって水中生活をしています。

日本には100種類以上の爬虫類が生息していますが、そのうち身近な環境で出会う機会が多い12種を紹介します。

・アオダイショウ(全長100- 200 cm)

日本の固有種で、本土では最大のヘビです。食性は肉食で、鳥類とその卵や哺乳類を食べることからネズミトリという別名もあります。平地から山地にかけての森林や農地に生息し、樹上まで垂直に登ることができます。樹上性が強く、春から夏にかけては樹上にある鳥の巣を襲います。

・ニホンマムシ(全長45-65cm)

日本列島およびその周辺の島にのみ分布し、平地から山地にかけての森林や水田などに生息する身近で有名な毒ヘビです。哺乳類や鳥類、両生・爬虫類など様々な動物を捕食します。危険を感じると尾を細かく震わせて威嚇するため、そのときは注意が必要です。

・シマヘビ(全長80-200cm)

日本列島に広く分布して個体数も多いことから、最もよく知られているヘビです。無毒ですが、神経質で攻撃的な傾向があります。主にカエル類を捕食しているため、水田や溪流などの水場で見かける機会が多くあります。なお、シマヘビの黒化型はカラスヘビと呼ばれています。

・ヤマカガシ(全長60-120cm)

本州以南に分布する日本固有種で、赤と黒の入りまじった独特の模様があります。かつては無毒種と考えられていましたが、現在では有毒種に変更されました。主に水田近くでカエルを主食としており、春先にはオタマジャクシを好んで食べます。



アオダイショウ



ニホンマムシ



シマヘビ



ヤマカガシ



ジムグリ



ヒバカリ

・ジムグリ(全長70-100cm)

日本本土の固有種で主に森林に生息し、開けた明るい場所は好まないようです。高温に弱いために半地中性の生活することから、「地潜り」という名前がつきました。成体の色彩は赤みがかった茶褐色に黒い斑紋があり、また無斑紋で全身が赤い個体はアカジムグリと呼ばれています。

・ヒバカリ(全長40-65cm)

本州・四国・九州に分布し、森林や水田、草地などに生息しています。薄暗い時間帯を好んで活動するため、早朝や夕方に姿を見せる傾向があります。水辺にいたることが多く、水中に潜ってカエルやオタマジャクシ、小型魚類などを好んで捕食します。

・ニホンヤモリ(全長10-14cm)

中国東部、朝鮮半島、日本に分布し、日本では古い時代に大陸から侵入した外来種と考えられています。民家とその周辺に生息し、都市部などでも普通に見ることができます。昆虫や蜘蛛などを食べる肉食性で、獲物を求めて灯火の周りに姿を見せます。夜行性で、昼間は壁の隙間などに潜んでいます。

・ニホンカナヘビ(全長18-25cm)

日本本土の固有種で里山の草地などに多く、民家の庭先でも見ることができます。昼行性で、夏の気温が高い時間帯には草陰などの涼しい場所に潜んでいます。昆虫や蜘蛛などを捕食するほか、腐果などを摂食することもあります。飼育しやすいため、ペットとしても飼育されています。

・ニホントカゲ(全長16-25cm)

西日本に分布し、東日本の個体群は姉妹種のヒガシニホントカゲになります。尾が青く、幼体には5本の縦縞が入ります。草原や民家の庭などに多く、特に石垣の隙間を好みます。昆虫や蜘蛛などを食べ、天敵に襲われると尾を切って逃げる習性があります。

・ニホンイシガメ(全長15-27cm)

関東以南に分布する日本固有種で、幼体はゼニガメと呼ばれています。河川や池沼、湿地などに生息し、半水棲できれいな水質を好みます。冬季には水中の穴や石、落ち葉の下などで越冬します。雑食性で魚類や甲殻類、カエル、巻き貝、水生植物の葉など様々なものを食べています。

・クサガメ(全長10-25cm)

本州・四国・九州に分布していますが、自然分布ではなくて18世紀末に大陸から移入されたと考えられています。流れの緩やかな河川や溜池、水田などに生息し、里山では道路を横切っている姿をよく見かけます。雑食性で、水生昆虫やオタマジャクシ、ザリガニ、水草などを食べています。

・ミシシippアカミガメ(全長8-28cm)

北米南部が原産で、日本ではペットのミドリガメとして飼育されてきました。現在では野外に放された個体が繁殖して、日本各地で広く野生化しています。都会の池で見られるカメはほとんどが本種です。なお、法律によってペットとして飼育はできませんが、野外に放つことは禁止されています。



ニホンヤモリ



ニホンカナヘビ



ニホントカゲ



ニホンイシガメ



クサガメ



ミシシippアカミガメ

巣箱とビオトープ

【今の地球は、凄まじい速度で生き物が絶滅しているなど「ネガティブ」な状態にあります。これを2030年までに生物の種の数が増えるなど「ポジティブ」な状態にしていくために、生態系が豊かになるような経済活動へ切り替えていく取り組みが推し進められています。】

環境省公式エコ・マガジンより抜粋

<https://www.env.go.jp/guide/info/ecojin/eye/20240214.html>

これはネイチャーポジティブのポイントを解説した一文です。しかし、いざ取り組むぞ!となった時に、実感を持って取り組める人は多くないと思います。人の生活圏の都市化が進み、身近な野生動植物の存在に気付けない環境で生活している人が増えているからです。

ビオトープは「身近な野生動植物の存在に気付く場」としても有用であり、生物多様性保全の取り組みの入り口として、重要な役割を果たすと私は考えています。今回は、その中でもエコアップや観察補助に役立つ「巣箱」についてご紹介します。

<目立たないように住処を構える野鳥たちの例>



図.1 樹冠に紛れて巣を架けるアオバト



図.2 林床に紛れて巣を架けるセンダイムシクイ



法人会員
株式会社地域環境計画
北海道支社 生物多様性推進室
松岡和樹

巣箱は野生動物に住処を提供するものです。野生動物にとっての住処は「天敵等の脅威から逃れられる安心安全な場所」であることが多いので、私は巣箱がそうした役割を担っていることを意識して設置しています。加えて、観察ツールとしての役割を意識して設置することも多々あります。

野生動物は天敵に見つからないように生活していて、特に住処は安心安全な場所が良いので、ことさら目立たないように、隠すように構えます。多くの野生動物は、人間を天敵相当の脅威として捉えているので、人間にも見つからないように活動していることが普通です。

野生動物の営みを観察するのは至難の業ですが、これを容易にするのが巣箱だと思っています。巣箱を設置することで、野生動物の心理や本能をうまく利用して、野外においてもじっくりと観察することができるようになります。

野生動物を観察する際は、適切な距離を保つことがマナーとなります。この距離は人間本位になることが多く、野外フィールドにおいては巣の位置に気付かず、野鳥が嫌がる距離まで接近してしまうことが、実はそれなりにあると思います。一方、巣箱は存在する場所がわかっているので、うっかり近づくことなく、野生動物との距離を適切に保って観察すること、またはさせることが可能となります。

例えば、幼稚園のビオトープ。園児たちが過ごす教室の窓越しに見える位置に巣箱を設置すると、窓ガラスがブラインドの代わりとなり、野生動物も人も良い距離を保つことができます。巣箱にまつわる絵本を作成し、読み聞かせを行いながら、野鳥の営みを園児とともに見守る環境教育を行うことも可能となります。

このような取組は、老人ホームや企業緑地等にある様々なビオトープで応用展開可能であり、身近な野生動物の存在を知ってもらうための普及啓発として大きな効果をもたらします。

巣箱設置は良いことばかりではありません。巣箱そのものが人工物であるため、設置した後に管理せずに放置してしまうと、いずれ朽ちて釘等のゴミを残置することになります。

また、木の幹に巣箱を括り付ける際に、強く締め付けて設置すると、樹木の成長を阻害します。そうならないように麻縄等を使って締め付けすぎないように括り付けると、今度は巣箱の落下の確率が高まります。

さらに、ハシブトガラスに巣箱開閉の手段やそこに小鳥が卵を産んでいることを覚えられてしまうと、全ての巣箱が開けられて、卵を産むたびに食べられてしまいます。

このようなことが発生しないように、巣箱を設置したら保守・管理を徹底して行うことが大切です。野生の世界に人間が介入した場合は、人間が最後まで責任を持って管理していくことが賢明だと思います。



図3 巣箱を開ける術を知ったハシブトガラス

巣箱は樹洞などの自然下にできた空洞を模したもので、設置する時は樹洞を意識すると良いです。最も模倣しやすいのは、キツキ類の巣穴です。種によって多少の違いはありますが、キツキ類は大まかに以下の条件に合う場所に巣穴を掘っているのです。巣箱設置の際はこれらの条件を意識すると良いです。

- ・幹が概ね直立している
- ・下部に枝がない(一本立ちしている)
- ・幹がある程度太い
- ・開けた空間に面している

巣箱の形や大きさを変えると、様々な種が利用しますし、巣箱の中に残っている巣材からも、利用種を想像することができます。オーソドックスな場合は、巣穴の大きさを変えるだけで、ある程度の利用種を誘導させることが可能です。



オーソドックスタイプ
(シジュウカラ等用)

オープンタイプ
(キビタキ・オオルリ用)



大型タイプ
(ハリオアマツバメ用)

ゴジュウカラの巣材
(多くの樹皮を敷く)



キビタキの巣材
(枯葉を多く使用)

オオルリの巣材
(苔を多く使用)



巣箱に訪れたスズメ
(直径3cm以上の穴)

巣穴から顔を出す
シジュウカラ
(直径2.7cm以上の穴)



巣箱で抱卵するフクロウ
(直径10cm以上の穴)

最後まで適切な管理を行いながら、良い場所・良いカタチで巣箱を設置すると、生物多様性を豊かにするだけでなく、ピオトープの生きもの観察も充実させることができます。

興味のある方は是非チャレンジしてみてください。

会員・BA等投稿

キツツキの世界 その7

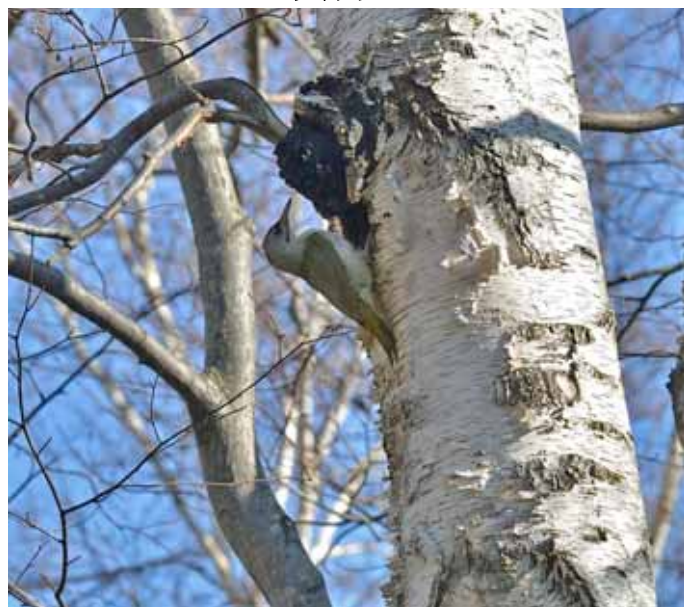
巣作りを止めたキツツキ

白樺に巣作りを始めたが、春先の樹液の多さにより止めてしまったと思われるクマガラとヤマゲラ。

クマガラ



ヤマゲラ



幌加内町ビオトープ研究会代表
日本ビオトープ協会個人会員
内海 千樫

アカゲラとヤマゲラの巣を狙うコムクドリ

自分で巣穴を掘る事のできないコムクドリは、丁度良い大きさのアカゲラとヤマゲラの巣の乗っ取りを企てます。

アカゲラの巣を狙うコムクドリの雌



アカゲラの巣に巣材を運び込むコムクドリ♂



コゲラは辛いよ

コゲラが巣を作り始めた



ニュウナイスズメ♂がやって来た



コゲラは丁度スズメ位の大きさなので、ニュウナイスズメの格好の標的なのです。



ニュウナイスズメ♀がコゲラの留守中に巣の中の木屑を捨てています。

巣材運び込むコゲラ♀



帰って来たコゲラと鉢合わせしたニュウナイスズメ♀



スクランブルをかけるコゲラ



(次号・その8に続きます)